

< 学内トピックス > 最近の大学生について思うこと

著者	北川 宏
雑誌名	筑波フォーラム
号	62
ページ	125-127
発行年	2002-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/8546

最近の大学生について思うこと

北川 宏
化学系助教授

筑波大学に異動してはや2年になる。大学を卒業してから、国立研究所、大学院大学に在職していた関係で、講義と学生実験を担当するのは初めてで準備が大変である。その一方で、学部学生と接するのは久しぶりで気持ちが若返ったような気がする。将来の夢をたくさん持っている学生諸君から多くのエネルギーをもらいながら仕事ができるのは、自分にとって大きなプラスとなっている。しかしながら、最近の大学生や大学院生と講義や実験、また学会などで接して気になることがあり、私の雑感を以下に述べさせていただきます。

20年も前になるが大学に入学したとき一番嬉しかったのは、「もうこれで嫌いな授業を受講しないで好きな科目だけを選択できる」、「試験のための勉強をしなくてもいい」ことでした。在籍していた大学（学部）では学科制度が無く、必須科目は語学と体育のみで、卒業研究です

ら選択科目でした。所属は理学部でしたが教養課程（1,2年次）では主に文系の単位を、専門課程（3,4年次）では理学教養の単位を選択しました。新学期には最初いろいろな授業に出席してみても、興味がもてそうな授業だけを選択し、自分にとってつまらない授業、声の小さな教官の授業、やる気のなさそうな教官の授業などは選択しませんでした。また自分の希望する科目がなければ、他学部にまたがる友人らと「自主ゼミ」を行いました。高校生のときは自分には科目の選択権が殆どなかったわけですが、大学生になって「取捨選択できる」ということがすごく嬉しかったわけです。つまり、学生が大学での科目と教官を選別できるわけです。高い授業料を払って高等教育を受けるわけですから、当然の権利です。私の場合は、専門課程では主に物理と化学の科目を採りましたが、講義は殆ど採らず実習が主体でした。今では

化学の授業を担当しているわけですが、私自身は学生時代化学の講義に興味を持たず殆ど受けていません。そのせいで、大学院の試験を受ける際には、夏休み2ヶ月間外界との接触を断って猛勉強しました。当時の御巢鷹山での日航機墜落事故を9月頭の大学院入試まで知らなかったぐらいです。

筑波大学においては、「授業がある（設定されている）から受講する」という受け身の学生が多いように感じられます。これは最近の学生の傾向かもしれません。しかしここでもう一度学生諸君に、大学に合格した直後の、将来への夢を膨らましていた時の自分を思い起こしていただきたいのです。少なからず、「自分の好きな分野の勉強、やりたいことを思いっきりやってやるぞ」という気持ちをもみなさん持っていたはずです。勉強は、好きなことやりたいことを優先してまずやればよいと思います。嫌いなこと興味ももてないことは必要のない限りすることはなく、本当に必要に迫られたときにやればよいわけです。私の大学院入試のときの勉強がそうでしたが、進学してから必要となる科目が入試に設定されているわけですから、その時の勉強は今でも十分に役に立っています。そのおかげで理解が進み、新たに興味がわいた

学問分野も数多くありました。

他方、今日の日本における大学院生を含む若手研究者の現状を考えますと、例えば化学や物理学関連の学会や討論会で若い学生諸君が質問を全然しないことが大変気になります。私は日本の科学の将来に大いに不安を感じます。恐らくほとんどの学生は、“勉強させてもらっている”、“講演を聴かせて頂いている”という受け身の姿勢で学会に参加しているように私には思えます。本来学会や討論会は討論する場のはずです。積極的に討論に参加して、はじめて勉強になるのです。また、同じ研究室の人の発表を聞きに来て終わると会場から出ていき休憩室で雑談しているのをしばしば見かけますが、何をしに学会へ来ているのだろうと首を傾げてしまいます。同じ研究室の人の研究は、報告会や発表練習会で幾度も聞いて熟知しているわけですから、よほど関連する研究で質疑応答に興味がない限り、私の場合は他の研究室の発表を中心に聞き回りました。さらに、学生の発表の仕方にも疑問を感じます。“前回は何々について報告しましたが、今回はここをこれに変えましたので報告します”というようなイントロが多々見受けられます。私にとって若い学生がどんなことに興味を持ってその研究を行ってい

るかということに関心があります。研究の詳細も勿論大事ですが、研究にとりかかった動機がわからずして、その人の研究内容を理解することはできません。

ところで最近の学生の方は自分の専門分野しか勉強していないように思えます。井の中の蛙にならないためにも、研究の幅を広げるためにも、広範囲に勉強するほうが良いと思います。私は学生時代、指導教官から、“化学科に所属する学生が化学をよく理解していて当たり前、これからの時代は物理や他の科学分野にも精通していなくてはならない”としばしば諭されました。それで私は物性物理の勉強をしましたが、現在の自分にとっては大変役に立っています。指導教官の得意な分野は自然とその学生に身に付くものですから、私は指導教官の不得意な分野をせっせと勉強しました。指導教官の手のひらの上でしか研究できない学生にはなりたくなかったからです。

さて、私は現在大学院生を指導する立場になっていますが、“ああしなさい、こうしなさい”と学生になるべく言わないように努力しています。勿論最初の半年ぐらいは手取り足取り指導しますが、特に博士課程に進む学生には放任するようにしています。その結果、研究を行う学生は最短コースを歩まず寄り道するわ

けですから、教官にとっては忍耐を必要とします。しかし、与えられた研究テーマに何の疑問も持たず何も考えない学生をいくら創り出しても、科学の将来には何のプラスにもならないと考えています。誰でもいつかは一人立ちしないはいけません。紆余曲折を経て学生自ら結論に到達したとき、学生は充実感を覚えそして自信をつけます。私も学生から良い刺激を受けることになります。学生が自分の不得意とする面を補ってくれることほど嬉しいことはありません。しかも、教官が予想していたところに宝が眠っていないことの方が多いためです。

私自身教育者としてまだまだ駆け出しではありますが、この場をお借りして私の愚見を述べさせていただきました。私の教育に対する現在の考えは、前任地での大学院生に対する数々の研究指導の過ちとその反省の上に立っているもので、今後とも少なからず失敗を繰り返すことですが、試行錯誤して大学教育に精進していきたいと思っています。科学の将来に貢献される若手が1人でも多く筑波大学から育つことを願ってやみません。

(きたがわひろし 固体物性化学)